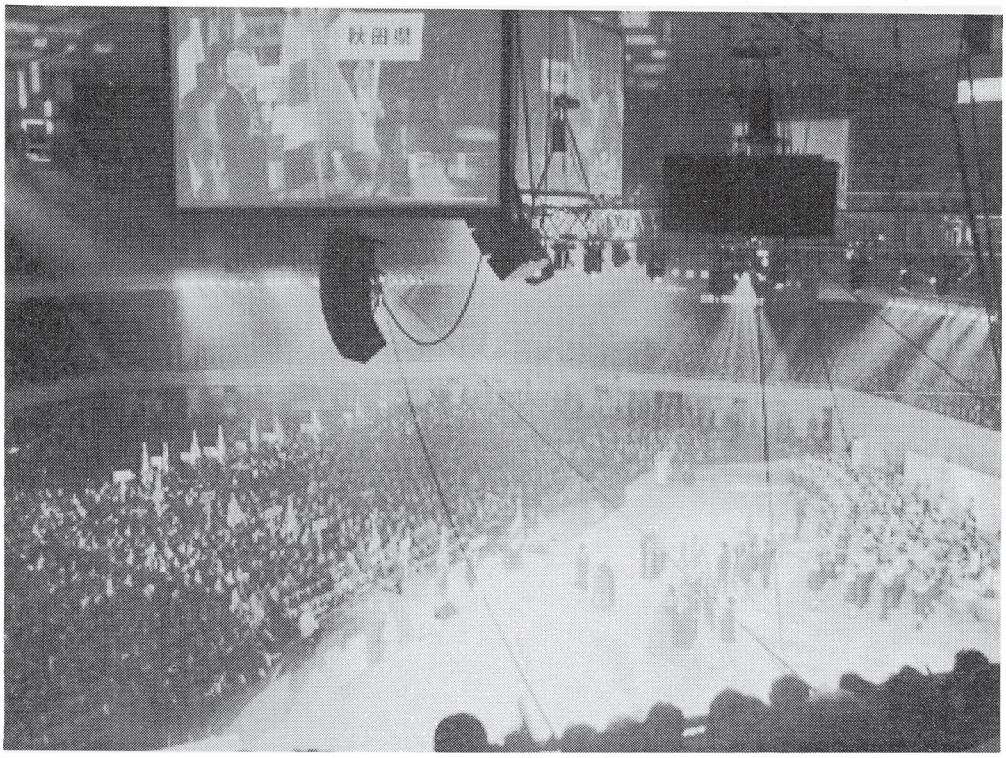
梅花流全国奉詠大会
来年は“秋田”で開催



梅花流創立五十周年記念全国大会　秋田県梅花講の入場　平成十四年五月二十二日　東京・日本武道館

平成14年7月15日
第19号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長　柴田弘一
題字　初代会長・故加藤信三師
編集　広報部・佐藤俊晃
梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町　待月院　嶋森憲雄
電話（018-852-9566）

梅花流師範・詠範の会

会長　柴田弘一

梅花流創立五十周年を迎え、去る五月二十二、二十三日、東京武道館に於て「梅花流創立五十周年記念奉讃大会」が二万人の講員参加のもと、盛会裡に開催されました。

秋田県梅花講は、北海道第一、青森、宮城、山形第一、第二の講員と共に、総勢六百名で、二十二日の第四番目の登壇でした。

「開山忌御和讃」「開山忌御詠歌」を朗々と、声高らかに奉詠し、立派に登壇を果たしました。

閉会時、大会副会長より「来年の全国奉詠大会は、世界遺産の白神山地を控える、山紫水明の地”秋田県“にて開催します」の発表がありました。同時に秋田県側から大きな拍手と歓声が起こりました。

会場は大館市樹海ドームで、開催期日は未発表ですが、五月の下旬になると思われます。

東北六県の中では、唯一大会が開かれていなかった吾が秋田県が、五十周年の次の年の開催地となったことは、梅花流の新たなる歩みとともに、大きな期待を寄せて迎えられるものと思われてなりません。

県内梅花講員、ご寺院、寺族共に一丸となって、秋田県での大会を盛り上げ、成功させましょう。

来年は”秋田が会場“だよー。

第一回秋田県梅花流講習会　昭和三十年　於大館市・宗福寺

秋田県梅花流ことはじめ

梅花流五十周年に思う

比内町全應寺　佐藤仁鳳

今年は高祖道元禅師様の七百五十回大遠忌報恩の年です。報恩法要は三月から十月まで大本山永平寺で勤まります。

「梅花流正法教会」として発足したのは、高祖様七百回大遠忌報恩のためでした。秋田に梅花の根を下ろして四十年になります。大館の宗福寺様を会場に第一回目の講習会が催され、各寺に梅花講が生まれました。

四月二十三日から二十九日までの報恩授戒会に随喜上山してきました。戒弟の四衆は約三百六十余名、随喜上山の寺院は三百二十余名でした。朝三時間、昼二時間、夕二時間、夜一時間の報恩法要。戒弟は午前と午後の説戒、朝昼夕の食事は若い雲水のお給仕で作法にしたがって行われます。戒弟さんも梅花師範の先導で、聖号、三宝、授戒の御和讃の奉詠を行ない、あの広い法堂に清らかな声が響き渡り、法悦に心打たれました。三時半振鈴、九時開枕（就寝）の毎日です。

梅花の奉詠は講員一同が心を一つにして奉詠することが一番です。皆さんの御精進を祈ります。

梅花流講習会　昭和三十七年

於本荘市・東林寺にて（丹生純雄師範と）

雄和町相川寺　丹生純雄

私が梅花流を知るようになったのは、もはや戦後ではないなどと言われ、所得倍増とも言われ、農村では耕耘機などの機械化に入る頃の昭和三十四年である。

現職講習会の休み時間に、輪になって何かをお唱えしており、その中心におられる方が佐藤仁鳳老師であった。「この梅花流は自分の音の高さでお唱えすればよい」というお話であった。

音楽的なことは特に苦手な私であるが、このお話で少し興味を覚えるようになり、まわりを見る

と、梅花のレコードを持っている方がありました。そのころの大きなテープレコーダを求めてレコードを録音し、お寺参りの時、皆さんに聞いてもらって勉強をし始めた。

三十円の普及版の教典をまづ用意し、たしか六百五十円の鈴鉦一式は皆さんに苦心して買い求めてもらった記憶がある。その他は少しづつ注文を取り、用意していった。先輩の老師に来ていただいて作法・所作も教えてもらった。

昭和三十六年に「梅花流秋田県相川寺支部」の設置となり、本荘市のお寺で本荘由利地区のお寺の会である「和敬会」が中心となって二泊三日の講習、検定、奉詠大会があり、数名で参加した。それから年々参加者が多くなっていった。

これは、ささやかな相川寺梅花講発足の頃である。県北の秋田県梅花の親とも思われる佐藤芳雄老師と、佐藤仁鳳老師や初代師範会長の加藤信三老師、わが先輩本間三義老師等よりご指導を受けて、本荘の本間真英老師、佐藤道機老師等からご法愛をいただいた。

数年前はご本山総持寺の太祖堂で奉詠をさせていただき、一昨年は講発足四十年ということで、ご本山永平寺の法堂でお唱えをさせていただくことができた。法悦の世界であった。

これからの県内の梅花は本当に人材が豊かである。必ずや、ますます発展していくことであろうし、またそれを祈念している。

合掌

梅花流奉詠大会　昭和三十年代　大館・北秋田地区

本荘市泉流寺東堂　佐藤道機

梅花流が高祖道元禅師七百回大遠忌の年に創立されて五十周年を迎えるに当たり、由利本庄における梅花流の芽生えを振り返るのも感慨ひとしおのものがある。

顧みれば昭和三十年頃かと思うが、当時由利本荘地区の曹洞宗寺院で組織する和敬会という会があり、六十二ケ寺あった。和敬会で主催し、本荘の永泉寺様を会場として、静岡の大島賢龍老師を講師として二泊三日で講習会を開催し、和敬会の会員を講習員として三年間先ず勉強し、永泉寺を支部として研修に励んだ。その後各自に支部結成届けを出し、会員を集めて発足したのが、昭和三十四、五年頃である。

その時の名称は「梅花流正法教会〇〇寺支部」で、総裁は時の管長高階瓏仙禅師の名前で許状が出ておる。由利郡内で約十支部が出来たようです。その後各支部で毎月勉強会を重ね、毎年和敬会で大会を開催し、優勝旗も造ってお互いに競い合って練習を重ね、これが和敬会の年間の大行事となった。また北の北秋、大館では当方より早く発足しており、お互いに交流しご指導をいただいた。その後宗務所でも組織造りをして下さり今日の隆盛を見るに到った。

創立以来五十年、教典も改訂されることになり、高祖道元禅師様の七百五十回大遠忌を期し、益々梅花の法のみ声が全国津々浦々に充満することを祈ってやみません。

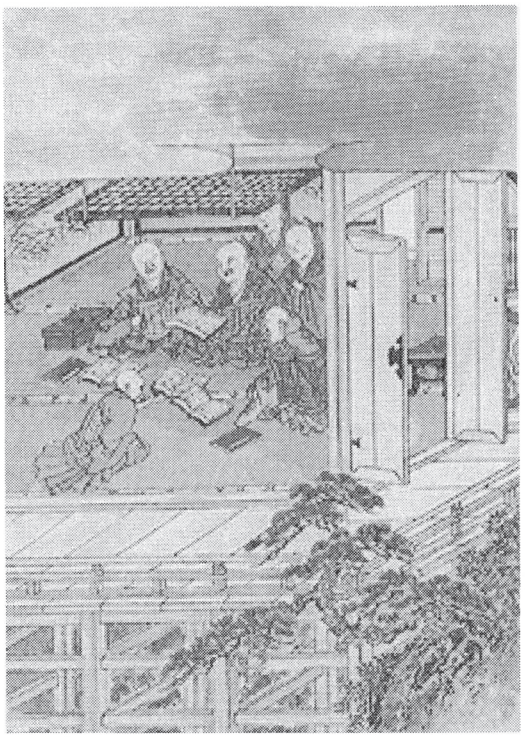
絵図でつづる

道元禅師ものがたり（2）

4 疑問

栄達への道を約束されていた生家を出て、仏門に身を投じた道元さまは、十三歳から十八歳まで比叡山で過ごしました。最も純粋で多感な時期を、当時の日本最高の仏教専修道場で過ごしたのです。しかし当時の比叡山は座主（比叡山の最高位）職をめぐる争いが繰り返され、世俗での出世をあきらめた貴族の子弟がかりそめに僧となった例も多く、純心な気持ちから出家した道元さまにとっては決して期待通りの場所ではなかったようです。

その頃、比叡山を中心とする日本の仏教界では「人間は生まれたその時から仏そのものというべき本性を備えている」という教えが広まっていました。けれども周囲の僧侶達の堕落ぶりを目の当たりにしている道元さまにとって、その教えはむなしいひびきとしてしか聞こえません。道元さまは山内の高僧達に問いかけます。「生まれながらこの身このまま仏だというのなら、どうして多くの仏祖達はあらためて発心をし、修行しなければならなかったのでしょうか」と。答えに窮した学匠の一人、公胤僧正は、京都建仁寺を訪ねることを勧めました。当時の建仁寺は宋から帰ってきたばかりの栄西禅師が、新しい禅の教えを弘めはじめていた寺院だったのです。



5 入宋

それ以前にも日本に禅の教えは伝えられていましたが、たくさんの仏教の伝統の中の一つとして扱われ、禅宗という宗派としての伝来はまだありませんでした。それが唐代から宋代にいたる中国仏教の中で、日常の暮らしの中に生き生きとした仏の教えを実践していこうという禅の考え方が台頭し、栄西禅師はその新しい教えをいちはやく日本へ伝えていたのでした。

道元さまが建仁寺を訪ねた頃は栄西禅師の弟子にあたる人々がおり、また宋と交易をする商人や大陸に渡って仏教を学ぼうと志す僧侶達が出入りしていました。その中で道元さまは明全和尚という人に強く魅かれました。栄西禅師につかえ、近い将来に渡宋の思いを抱いていた

道元さまひとくちメモ

☆お茶を伝えた栄西禅師☆

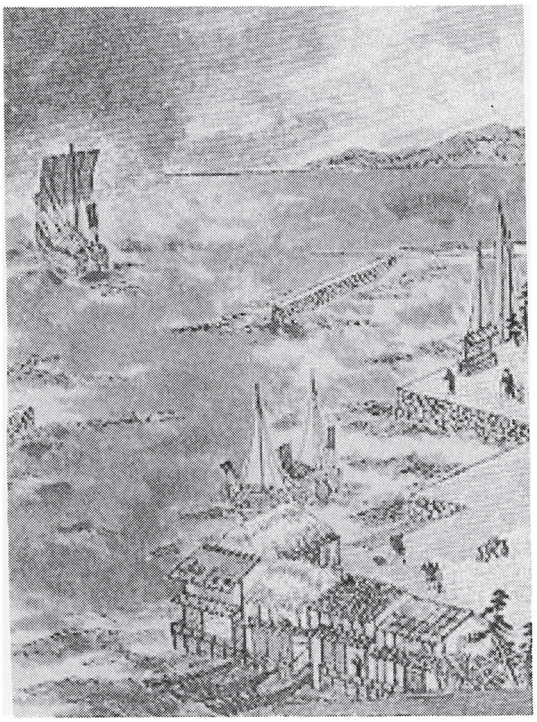
栄西禅師は禅宗の中でも臨済（りんざい）宗の教えを日本に伝えた最初の人です。また『喫茶養生記（きっさようじょうき）』という本を著して、身心の健康のためお茶を飲む習慣も紹介しました。建仁寺に住職していたある日、栄西禅師は、施主から寄付されていた絹織物を困っている俗人に与えてしまいました。その日のお米にも事欠く状態であった寺の僧侶達は栄西禅師を非難しましたが、禅師は、禅僧たるものは「一日絶食して餓死すとも苦しかるべからず」と答えたのです。

☆入宋にかける明全和尚の志☆

宋へ渡る直前、明全和尚にとって大きな問題がおこりました。かねて病床にあった自分の師・妙融（みょうゆう）の病が重くなり、あと数日の命という状態になったのです。妙融は明全に「どうか入宋の旅立ちを延期して私の最期までそばにいてほしい」と頼みました。周りの弟子達も妙融師の葬儀を終えてから出発することを明全に勧めます。しかし明全は「私がとどまって看病したところ

明全和尚を、道元さまは自分の禅のお師匠さまと仰ぎ、親しくその教えを受けました。そして道元さまも明全和尚さまと一緒に宋へ渡ろうと心に決めたのです。

貞応二（一二二三）年、念願かなって二人は九州博多から宋国へ向かう商船に乗り込み、あこがれの大陸へ出発しました。道元さま二十四歳の春でした。

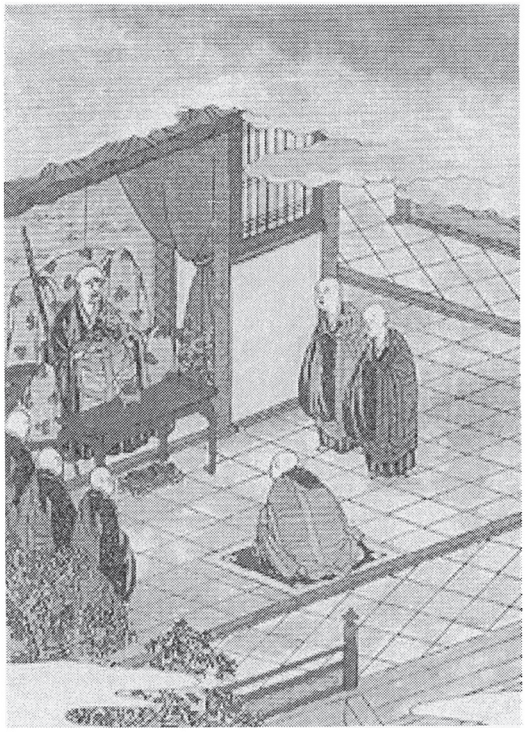


⑥ 正師

一行を乗せた船が着いたのは明州（みんしゅう）の寧波（にんぽう）という港でした。入国手続きの問題から約二ケ月を船中で過ごし、道元さまはやがて明全和尚さまとともに宋国の禅宗寺院にお師匠さまを訪ね歩く参学の旅に出ました。

大宋国という異国情緒はもとよりでしたが、道元さまはこの国の禅僧達の仏道に対する心がまえが、日本とは全く違って真剣であることに深く感銘しました。とくに住職を任されているわけでもない食事係や修行仲間の僧侶達の言動から、道元さまはいくども新鮮な驚きと感動を受け、求道の思いは日に日に高まっていました。しかし歴参する名僧と言われる人の中には、朝廷や世の名声に対する物欲しい気持ちがほの見える方もあり、道元さまはこの地においても満たされぬ違和感に悩むようになりました。そんなとき、上陸して初めに拝登していた天童山に、新しく如浄（にょじょう）禅師という方が住職となって、たいへん厳格な宗風を敷かれていることを知り、改めて天童山の門を叩いたのでした。

如浄禅師との初めての出会いは道元さまにとってこの上もない感激でした。その人の前に進んだだけで道元さまはこの方こそ自分が探し求めていた本当のお師匠様にちがいないと心に誓いました。一方、如浄禅師は外国からやって来た若い道元さまのまなざしに、真実の求道者の光を認めました。「昼夜いつでもよい。聞きたいことがあったらふだんの服装のままでかまわないから、私のところへ聞法に来なさい」と、破格の待遇をお許しになったのです。



で師の病気は良くならないだろう。それは迷いのために道を求めることをやめたことになる。しかし私が志を貫いて宋へ向かうならば、途中で命を落とすことがあっても仏法のために生きたあかしとして来世に志を遂げることが出来るだろう」と入宋の決意を変えませんでした。これをそばで聞いていた道元さまはその求道の態度に深い感銘を受けました。

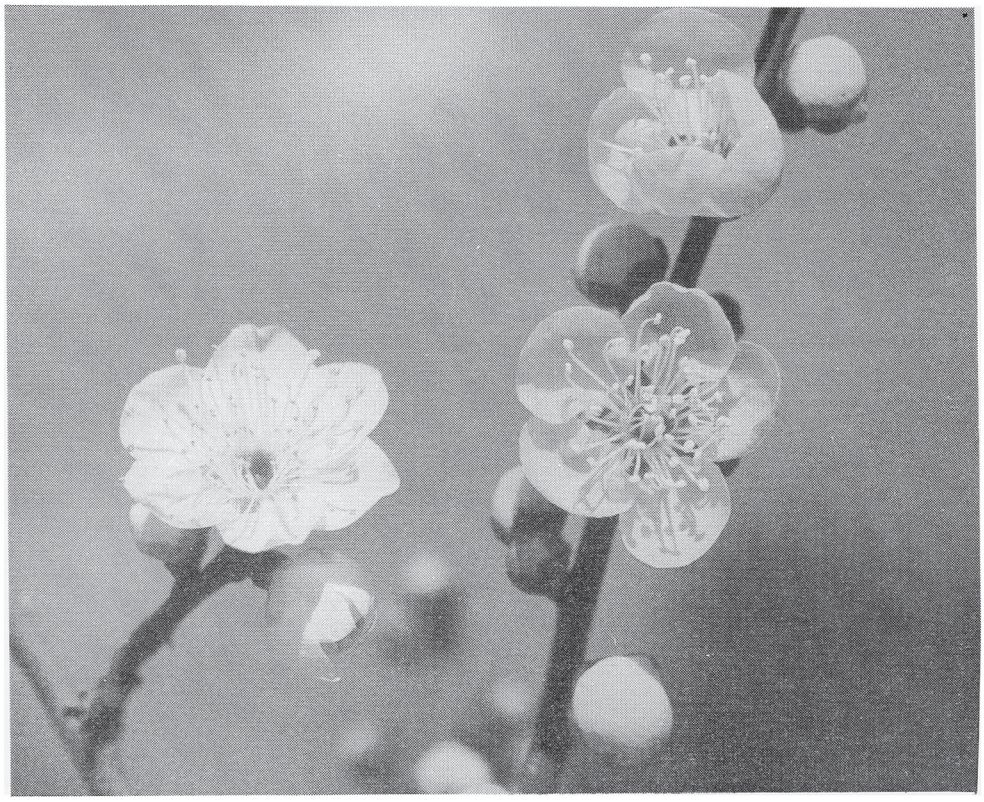
☆阿育王山の典座和尚☆

寧波（にんぽう）の港でまだ船中に過ごしていたある日、道元さまの乗った商船に宋国の老僧が食材の買出しにやって来ました。彼は阿育王山（あいくおうざん）の典座（てんぞ）（食事係）でした。日本の寺院では食事係とは名ばかりで実際の調理は雇いの人達に任せるのがふつうなのに、こうして買い物に来る僧侶を珍しいと道元さまは思いました。道元さまはその老典座に尋ねます「あなたほどのお年の方ならわざわざ食事の買い物なんかでこんなところまで出向くこともないのではないですか」。典座の答えは意外なものでした「お若い方、あなたはまだ修行ということがわかってないようだ。こうして修行僧の食事をまかなうということ自体、大切な修行なんですよ」と。

梅花 ちょっとぶじょほう づれづれ

あとつぎ養成と全国大会

秋田県宗務所長　合川町　太平寺　亀谷健樹



秋田県梅花講について語る時、三つの項に分類できると思う。まずその歴史、成り立ちであり発展の経緯である。創設の時のもろもろについては、以前の『同行』に佐藤仁鳳師範、他の方々が先述されたし、今回も多分お書きになられるだろうから、ここでは控えることにする。

ただ、うちの講について云うならば、約四十数年、毎月二回ずつ、今では第三部までもある定例の練習日を、よくぞ続行してくれたもの、と痛切に思う。この間、第一期の方々はほとんど逝去された。二代目、三代目の方があとを継いでお寺に来られる。まさに“継続は力なり”だ。これこそ梅花講だ、と痛感する。

二つ目は現在の状況である。率直に言って毎回の参集人数は少なく寂しい。何故こうなったのか。原因として考えられるのは、女性の就労率が高くなり、いわゆる趣味的教養的な梅花講には来れなくなった。また老齢化が拍車をかける。更に車社会が家庭人の仕事のみならず遊びに出かける機会を、飛躍的に増やした故でもあろう。

三つ目は将来の展望である。この講員の減少傾向に歯止めをかけ、いな逆に増やす方策を何とか探り、実行しなければならない。前記のあとつぎ養成が急務であるし、気軽に練習する場所と機会を持ちたい。お寺でなくとも集落の集会所など利用すると如何だろう。要するに、指導するものの熱意と、梅花への精進が問われるのは当然である。

ところで本県の梅花講、今年の最も大きな関心事は梅花流全国大会開催についてであろう。五月の武道館での記念大会で来年の場所が発表されるとのことである（この同行誌発行の頃には確定する）。なぜ、大館の樹海ドームで開催誘致することを県宗務所々会で決議したのか。その間の消息を個人の所感として申し述べたい。

第一に正伝の仏法と梅花流の誓願を、更に普く及ぼす教化のため。第二に大会開催によって本県の梅花流をいっそう拡充強化するため。第三に本県の地域産業振興にいささかなりとも貢献が出来たら、との理由である。実のところ東北六県で未実施の所が本県だけであるという事、梅花特派師範経験者が全国的にも屈指といわれる現在が、もっとも良いチャンスと云うのが挙げられよう。

ともあれ、日本でもっとも緑が多く、大自然が残っている山紫水明の秋田で、全国大会を何とか成功させたいものと、創設五十周年を迎え、一層その思いを深くしている昨今である。

みんなのつどい

おらほもやってるよ

師範・詠範の自主研修会をご紹介します

ばっけの会

地域　第九・十・十八教区
設立　平成十二年春
代表　保坂春聴
会員　二十五名

私達の会は正式名称を“梅花研修「ばっけの会」”と言います。発足してまだ一年の、名前のように雪の下から出て来たバッカリの、つぼみのような集まりです。会員は二十五名、県北地区の僧侶と寺族です。

時は昨年の二月下旬のある日、鷹巣町の龍泉寺に集まった数名の僧侶と寺族。謀議をめぐらしたのは「梅花の勉強会を作りませんか」と言うものでした。結論はすぐに出ました「それはいい、みんなで創りましょう！」。でも此処からがナカナカ決まらない。世話人は誰にしましょうか！会の名前は何としたらいいのかな？何処らへんの人々に呼び掛けたらいいのか？それよりも、研修の内容はどんなものが善いかしら？回数は、会場や講師は、会費は、等色々ありましたが、結局一番ヒマそうな人に代表世話人を勤めてもらうことになりお鉢が廻ってきました。事務局には代表の近くの有能な人が良いと言うことになり、同じ町内の太平寺副住職の亀谷隆道師にお願いしました。後は野となれ山となれ、実際に研修会を開きながら細かいところは会員の皆で相談しながら運営しましょうと言うことになりました。

県北地区の涅槃会もひと段落した四月の下旬、第一回目の研修会を開きました。二十人近くの方が参加してくれました。予想していたより多く、皆さんの梅花に対する熱い心を見せられたようでした。

講師は会員の師範や詠範の中からお願いしてます。受講者も講師も顔見知りなので、お互いに言いたいことが言える？間柄です。各々の教階に合わせた講習曲目でのクラス別けや、その時節に合わせた曲目での講習、など研修会ごとにクラスが二つや三つになります。

原則として涅槃会の三月とお盆の八月を除く毎月一回開催、会場は会員のお寺にしています。年に一度は特別講師をお願いして、別の目で講習をということで、秋田市東泉寺柴田先生に「初心者に講習する方法」を講習して戴きました。

さて、ようやく二年目です。正直なところ例会の参加者は一〇人前後です。でも、今年一年続けば来年は地元での全国大会です。一人でも多くの皆さんが梅花を口づさんでくれるよう、講員さんが増えるように念じて、自分達の研修に励んでます。

紹介者　合川町新田寺　保坂春聴

ばっけの会の楽しいメンバー・本日は少数精鋭なり！

受話器から聞こえる梅花のしらべ

◇テレホン梅花◇

☎〇一八-八七三-七六七六（はなみなむむ）

七月　六日　達磨大師御和讃
一三日　永平寺二祖讃仰
二〇日　総持寺二祖讃仰
二七日　浄心
八月　三日　戦災精霊供養御和讃
一〇日　迎火
一七日　妙鐘
二四日　同行御和讃
三一日　道交
九月　七日　学道御和讃
一四日　彼岸御和讃
二一日　香華
二八日　慕古
十月　五日　廓然
一二日　御授戒御和讃
一九日　太祖影向和讃・伝光
二六日　伝光

※ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
010-0111
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八-八七三-二六七五）

禅センター・梅花講習日程

平成十四年十二月までの宗務所主催の梅花講習日程をお知らせします。

【宗侶・寺族研修会】

七月一五日（十時半～十五時半）
講師　山中律雄師範
課題　改正点伝達　紫雲

十月一五日（十時半～十五時半）
講師　佐々木禅壱師範
課題　追弔和讃　追善供養和讃

十一月十四日（十時半～一五時半）
講師　柳川浩二師範
課題　報恩供養和讃　澄心

【檀信徒講習会】

七月十二日（一〇時～一五時）
講師　浅田高明師　亀谷隆道師
課題　影向　伝光

九月十三日（一〇時～一五時）
講師　小野碩瑛師　佐藤俊晃師
課題　学道和讃　慕古

十月十日（一〇時～一五時）
講師　伊藤道人師　森田英俊師
課題　菩提

十一月八日（一〇時～一五時）
講師　保坂春聴師　亀谷隆道師
課題　観音和讃　慈光

十二月十三日（一〇時～一五時）
講師　柿崎隆穏師　三浦賢翁師
課題　二祖国師和讃　永光

※内容は詠唱、作法、歌詞解説等。受講は無料、初心者も歓迎です。昼食は各自ご持参願います。

会場　秋田市宗務所・禅センター
でんわ　〇一八-八六八-六八七一

特派師範研修会

期日　平成14年7月18日（木）
時間　午前9時半受付～午後3時
会場　秋田市宗務所・禅センター
講師　葛西修哉師範・大谷真龍師範
対象　宗侶・寺族（檀信徒講員は参加できません）

秋田県梅花流奉詠大会

この秋には秋田県梅花流奉詠大会が開催されます。今年は梅花流創立五十周年。県南と県北二会場にわかれての開催です。ふだんの練習の成果を発揮し、明るくなごやかな交流の輪を広げましょう。

▽県北大会　九月三日
森吉町スポーツセンター
▽県南大会　九月七日
西目町シーガル

お申し込みは各梅花講長を通じて大会事務局へお届け下さい。

梅花流宗務所検定会

宗務所主催検定会のお知らせです。

▽県北（九・十教区）　九月二十五日
二ツ井町　二ツ井ヘルスセンター
▽県北（十一・十八教区）　十月一日
鹿角市　姫の湯ホテル
▽県南地区　九月二十五日
本荘市　恵林寺
▽中央地区　十月十一日
秋田市　さとみ温泉
▽三級検定　十月二十三日
秋田市　さとみ温泉

検定期日が近くなると各講長宛に受験申込要項が送付されます。お申し込みは各梅花講長を通じて検定事務局へお届け下さい。

余滴

梅花流五十周年を迎えて詠讃歌歌詞や題名が大幅に変更となりました。いろんなお考えがあるようですが、私たちがたしかな言葉によってもの言うべき布教者として、自分自身をふりかえるよい機会ではないかと思います。この節目を越えてよりよき方へ・・・